『独逸故事熟語字彙』編者　山川幸雄

上村直己

はじめに

明治時代の留学期間は後年より概して長期であった。特に明治初期は文部省留学生の留学期間は五年と長かった。しかしその後は段々短くなり、明治三十三年のドイツ語研究を目的とする最初の文部省留学生であった藤代禎輔（一高教授）と山口小太郎（東京外語教授）の場合は二年間であった。私費留学の場合は期間に制限がないので留学資金さえあれば長くなる傾向があった。だが、余りに長期の留学はドイツで就職する場合以外は当人の将来にとって必ずしもプラスではなかった。本稿で取り上げた山川幸雄（ゆきお）はそのような例に当てはまる一人であったように思う。彼は十五年間ドイツに留学し法学博士の学位を得て帰国したが、願ったであろう大学入りは果たし得ず高等学校の独語教師になった。しかもそれも病気のため比較的早く辞めてしまった。今日彼のことを知る人は皆無に近いと言ってもよいと思われるが、それでも長期のドイツ留学によって実地に習得した語学力はやはり非凡なものがあった。明治三十九年に南江堂より上梓した『独逸故事熟語字彙』や、その他ハウフ、クライストの作品の註解書はそれをよく示していると思う。

父・山川幸喜について

最初に近藤修之助・早見純一著『明治医家列伝』（第二篇）に収められた「山川幸喜先生之伝」[1]及び『明治過去帳』によって父・山川幸喜（ゆきよし）の略伝を記しておきたい。山川家は代々山内家に仕え禄高五百五十石を食む馬廻組であった。のち分家して医を業とするようになり、幸喜はその七代目に当たっていた。天保三年十月二十九日に土佐広岡村に生まれた。幼名を丑之助、次いで友益と称した。維新後は幸喜と改めた。父は小文次と称し産科を以て知られた。弘化二年郷里を去り、高知へ出た。そして山内公の側医荒川玄門について内科を修めた。嘉永五年三月、天下の形勢は西洋医学が勃興する兆しを察し、大阪へ出て緒方洪庵の門に入ろうと思い、宗家及び親戚に諮ったところ反対された。土佐藩では当時はまだ漢法の勢力が強く、宗家もこれを偏信し西洋医学を信じなかった。しかしその後蘭学者の川谷純成が緒方郁造の門より帰郷して開業するに際し幸喜は同氏について西洋医学の道に入った。その喜びは大きかった。

以後、六星霜黙々と修業し奥義を極めるに至った。安政四年秋高知市水道町四丁目に開業、民間済世の業に従った。翌五年天然痘が流行したが牛痘の接種を実施してその勢いを食い止めた。また電気術の治療上に必要なことを感じ自ら医用電気を模造し、使用したところ効果著しく人々を驚嘆させた。万延元年獣類解剖会を創設し仲間と研鑽を重ね、それが引いては人体解剖につながった。これは土佐に於ける人体解剖の嚆矢だった。江戸ではこれは快挙として受けとめられたが土佐の漢方医たちは、彼らは解剖と称して人肉を食しているとしてこれを誹謗した。幸喜は毅然として従来にもまして西洋医学の打ち込むようになった。文久二年四月藩庁に召され江戸表容堂公側医加役となり、小姓組に昇進して禄二十石を給わった。ここで宗家と籍を異にし別に藩士となった。同七月初めて江戸に着き容堂公に仕え、傍ら西洋医学所に入り内外科を攻究した。慶応元年四月容堂公の側医本役となり相伴格に進められ禄二百石を下賜された。これは藩医としての最高位であり西洋医学を以て斯かる地位に就いたものは未曾有であった。同じ頃容堂公は

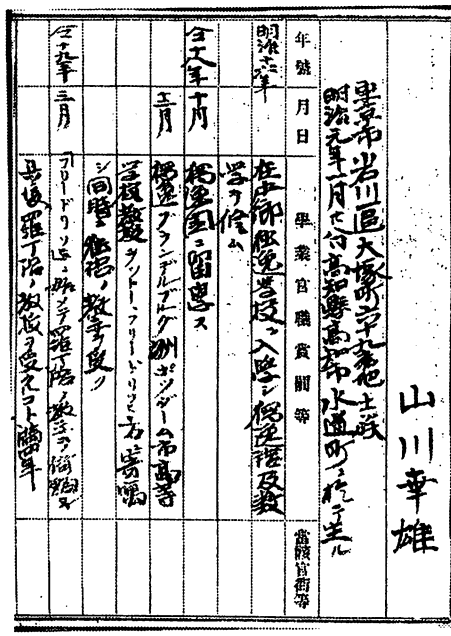
西洋医術の拡張のため大阪より緒方郁造を高知に招聘したが、幸喜は彼に親炙し西洋医道を研究し大いに得るところがあった。明治二年に上京し、宮内省の侍医に任ぜられた。明治十年の西南戦争では官軍のために九州まで出張して負傷者の治療に当たった。東京に戻ると在職八年にしてを官辞して数寄屋橋に開業した。その後幾多の医学・医療上の功績を残したが、明治四十四年（一九一一）九月十九日に東京小石川において死去した。人となりは慈謙にして温雅沈毅、人に接するに頗る懇篤で患者に深く信頼された。彼は西洋医学の先駆者であるのみならず医林の泰斗であった。

ちなみに「山川幸喜先生之伝」の最後は、長男の幸雄は明治十八年十月ドイツに渡航し、中学を経てベルリン大学に入り既に三年、専ら法学を学んでいて、近く成業を見るだろうと記し、次の言葉で終わっている。

「幸雄君前途望ア ル此ノ如シ先生亦憂フル所ナシ先生ノ今日ア ル天道其刻苦経営ノ労ニ報フル所ナル歟」

東京本郷台町の独逸学校入学

山川幸雄は東京大学教養学部蔵の履歴書によると、明治元年（一八六八）一月二十八日、高知市水通町において生まれた。幼少期のことは残念ながら不明である。履歴書によると、山川は明治十六年、本郷台町の独逸学校に入学し、ドイツ語と数学を修めた。独逸学校は明治十一年に当時東大医学部予科のドイツ語教員を務めていた山村一蔵によって設立されたもので、東大医学部予科の入学志望者の多くはここでドイツ語を学んだ。山村一蔵は明治十二年には死去したので、校主は夫人の山村ミッが務めた。独語教員には川上正光、高木計など東大医学部予科の教師が兼任した。このように独逸学校と東大医学予科とは密接な関係にあった。だが医学志望者だけでなく、単にドイツ語を修めるために独逸学校に入学する者も多くいたので、同校が明治十年代のドイツ語教育に果たした役割は非常に大きい。幸雄



山川幸雄

年號月日	學業官職賞罰等	高級官僚等
明治十八年	東京市牛込區大久保余丁町ニ於テ出生	
	獨逸學校ニ入學シ獨逸語及數學ヲ修ム	
同十九年十月	獨逸ニ留學ス	
十一月	獨逸ブランデルブルク州ポツダム市ニ轉居	
同廿年	獨逸數學ヲ研究シ同時ニ獨逸ノ教育ヲ受ク	
同廿年三月	フリードリッヒ・ウィルヘルム學院ノ數學ヲ修ム	
	爲替羅丁語ノ教授ヲ受ケコト約半年	

山川幸雄履歴書（東大教養学部蔵）

ドイツ留学時代

山川幸雄は明治十八年（一八八五）十月、十八歳の時、自費でドイツに留学した。そしてその期間は十五年にも及ぶのである。外務省外交史料館の旅券下付記録[2]によると、

旅券番号：二一四九七、

がここへ入学していることは最初、将来は医者になるつもりであったと思われる。父が医者であるので、そう考えて間違いないであろう。しかし彼は医者にはならなかった。独逸学校時代に何らかの心境の変化があり、医者になるのを断念し、法律を学ぶためドイツ留学を思い立ったと推定される。

年齢：十八、
本籍：高知県、
身分：士族、
行先：独逸国、
渡航目的：留学

となっている。そして明治十八年九月二十一日に免状（旅券）渡しになっている。

履歴書によると最初、ブランデンブルク州ポツダム市のギムナジウムの教授オットー・フリードリヒ方に寄寓し、そこで同時にドイツ語の教授を受けた。次いで十九年三月よりフリードリヒに頼んでラテン語の教授を受けること満四年。またその翌年からは歴史・地理・数学を「フハルヲ・ウィザムスキー」に、英語を英人「ロジェー」、仏語を独人で高等女子校長「シュミット」及び仏人「ピグー」に、ギリシャ語を高等学校教師「シュロスマン」に従い修業した。

一八八八年（明治二十一）四月にポツダム市立中学校に一旦入学した。そして翌年四月ベルリン大学法学部に入学した。一八九三年（明治二十六）四月から九五年までドクトル・ローゼンベルクに従い専ら公法を質問修業した。ベルリン大学では次のような講義を聴講した。[3]（フンボルト大学文書館の史料による）

Sommersemester 1889 ：

1. Enzyklopädie und Methologie des Rechts - Prof. Berner
2. Institutionen des römischen Rechts - Prof. Pernice
3. Geschichte des römischen Rechts - Prof. Pernice

4. Praktische Nationalökonomie - Prof. Wagner

Wintersemester 1889 / 1890 :

1. Pandekten Prof. Dernberg
2. Deutsches Staatarecht - Prof. von Gneist
3. Deutsche Reichs-und Rechtsgeschichte. - Prof. Brunner
4. Römisches Erbrecht - Prof. Eck
5. Gaius Institutionen - Prof. Bernstein

Sommersemester 1890 :

1. Deutsches Privatrecht - Prof. Brunner
2. Deutsches Strafrecht - Prof. Köhler
3. Logik und Einleitung in die Philosophie - Prof. Ebinghaus

Wintersemester 1890 / 1891 :

1. Volkerrecht - Prof. Dambach
2. Zivilrecht - Prof. Hinschius
3. Handels-und Seerecht - Prof. Goldschmidt
4. Auserlesene Zivilrechtfälle - Prof. Eck
5. Freiheit und Eigentum - Prof.Wagner

Sommersemester 1891 :

1. Deutscher Strafprozeß - Prof. Rubo
2. Juristisches Seminar - Prof. Eck

3. Preußisches Privatrecht - Prof. Dernberg

Wintersemester 1891 / 1892 :

1. Pandekten - Prof. Pernice
2. Verfassungsgeschichte Deutschlands in 19. Jahrhundert - Prof. Aegidi
3. Gerichtliche Medizin - Prof. Liman
4. Gerichtliche Obduktion - Prof. Liman

Sommersemester 1892 :

1. Kirchenrecht - Prof. Hübler
2. Verfassungsgeschichte der germanischen romanischen Völker - Prof. Delbruck

Wintersemester 1892 / 18923 :

1. Handels- und Seerecht - Prof. Brunner
2. Konkursrecht - Prof. Kohler
3. Strafrecht - Konservatorium - Prof. Kohler
4. Strafprozeß - Prof. Kohler
5. Preußisches Staatsrecht - Prof. v. Gneist
6. Über die neueren Reformen der preu β ischen Staatsverwaltung - Prof. v. Gneist

Sommersemester 1893 :

Wintersemester 1893/1894 : (Angabe nichtüberlierfert)

Studium bis zum 9.1.1894

当時のベルリン大学には全分野に第一級の学者が集まっていたが、それは山川が在籍した法学部でも同様で、彼が聴講した諸教授の中には次のような世界的学者がいた。

まず法学者で政治家でもあったグナイスト(R.v.Gneist)がいたが、彼は伊藤博文が憲法調査に際してその講義を聴いたことでも有名だ。アエギジ(Aegidi)は法学者、評論家、政治家として知られる。ペルニッェ(L.L.Pernice)はローマ法研究で知られる法制史学者で、プロイセン科学アカデミー会員でもあった。コーラー(J.Kohler)は法学全般についての多数の著作を残し、国際的にも有名な学者であった。エック(E.L. Eck)はベルリン大学教授の傍らドイツ法律家会議書記を務めた。ゴールドシュミット(L.Goldschmidt)はベルリン大学初代商法講座担当教授として知られた。ヒンシウス(P.Hinschius)は法学者、政治家。彼の『ドイツにおけるカトリック教徒及びプロテスタント教徒の教会法』(Das Kirchenrecht der Katholiken und Protestanten in Deutschland)は今日でも基本文献となっている。ルーボ(E.Rubo)は刑法、刑事訴訟法、民法の専門家として知られた。

こうしたすぐれた学者の講義を聴いたことは彼に自信を与えただろうし、誇りでもあったに違いない。

一八九五年(明治二十八)から一八九八年(同三十一)までベルリン市区裁判所判事ビックに従い、商法と民法の理論と実地について質問し、研修した。ベルリン大学時代の住所は、雑誌『Ost＝Asien 東亜』掲載の日本人住所録によると、最初はポツダム市ワイゼン街35番地、次いでベルリン市北西ッェルター街10番地、さらにブルッケン＝アレー35番地、最後はグリューネワルトの高級住宅街に住んだ。同誌一八九八年十一月号では彼の住所はシャルロッテンブルク地区のグロールマン街61番地となっている。山川はそこではCand.juri Yukio Yamakawa(博士候補 法学 山川幸雄)と表記されている。

父が裕福な医者であるところから、幸雄の留学生活は恵まれたものであったろう。第一、十五年も留学していること自体、裕福な家庭でなければ出来ないことではあるまいか。この間父が帰国を何回か命じたが服さなかった。あまり若くして留学したので向こうの生活がよくなったようだ。

九十八年の夏山川はベルリンを去り、ゲッチンゲン大学に移った。法学部に籍を置き[4]、学位論文の準備をした。そのためにバール(Carl Ludwig von Bar)教授[5]に個人的指導を受けた。バールはゲッチンゲン大学の刑法及び民事訴訟法の正教授であった。一八九九年(明治三十二)、学位論文 **Zur Lehre von der Mittäterschaft. Ein Beitrag zur Interpretation des Paragraph 47 des Strafgesetzbuches für das Deutsche Reich.** 「共同正犯の理論によせて、独逸刑法第四十七条の解釈に対する一寄与」を提出した。翌年(一九〇〇)三月八日、法学全科の口頭試験に及第し、「ドクトル・ユリス・ウトリウスクコ」(両法学博士)の学位を授与された。論文の主査はバール教授であった。同論文は現在ゲッチンゲン国立大学図書館に保存されている。[6]

帰国へ

山川は学位を取得するとすぐに帰国した。雑誌『Ost=Asien東亜』二十六号(一九〇〇年五月)の「雑報」欄(Vermischtes)に次のように報じられている。

Herr Dr. jur. Yukio Yamakawa hat sich nach 15 jährigem Studium in Deutschland am 17. April in Genua mit dem Dampfer >Sachsen< nach Japan eingeschifft.

これによって山川一九〇〇年は四月十七日にイタリアのジェノバ港から汽船ザクセン号にて帰国したことが分かる。五月帰朝。

明治三十三年(一九〇〇)十月二十日、山川幸雄(Dr. jur. Y. Yamakawa)はOAG(ドイツ東亜協会)に入会した。[7]当時彼は東京の「元数寄屋町二丁目一番地」に住んでいた。[8]

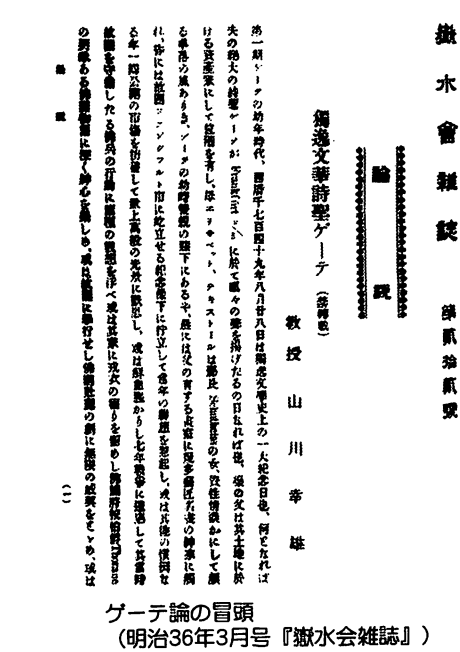
三高教授就任

十五年にも及ぶドイツ留学の経験と、学位を携えて帰国した山川は恐らく大学教授の地位を希望したと思われるが、当時の学閥の激しい大学ではそれは叶えられず、履歴書によると明治三十五年（一九〇二）八月二十六日付で京都三高の教授となった（高等官七等、八給俸下賜）。独語と法学通論を担当した。同三十七年十月高等官五等、同三十九年十二月高等官四等に昇任。最初「大学予科一部三年甲級長」[09]を、翌年には「一部三年乙級長」をそれぞれ務めた。[08]『第三高等学校一覧』（明治三十八・三十九年）の「職員」欄に見ると、独語教員には山川以外に賀来熊次郎、大井和久、榊亮三郎、中村健一郎、内田新也の各教授、鈴木庄司、殿井仁三郎の各嘱託講師、傭外国人教師のブラッシュがいた。山川は独語、法学通論、ラテン語を担当している。

山川は独語の授業ではドイツ文学の朗読を得意として生徒に印象を残したらしい。[00]

山川は三高の校友会雑誌である『嶽水会雑誌』の第二十二号（明治36・3）及び二十五号（同36・12）に二回にわたり「独逸文華詩聖ゲーテ」を寄稿している。山川はまずゲーテの生涯を、「第一期幼年時代」「第二期ワイマールに於ける二十年」「第三期シルレルとの交際期間」「第四老年期」の四期に分けそれぞれ略述している。例としてここでは「第三期シルレルとの交際期間」の前半を紹介しよう。

詩聖ゲーテがシルレルと相識りしは千七百八十八年なりしも、こは唯一回の会見たるに過ぎず、其交情の深厚を来せし原因は、実に千七百九十四年シルレルが月刊雑誌ホーレンの発行に際し、ゲーテに其補助を依嘱し来り、渠が之を快諾せしに初まる、蓋しゲーテの英敏なる実際的観察の能力は、シルレルの崇高なる理想的理解力と相対して、調和補正、以て向上の精進を築きし也、而して此の交際の初に当りては、互に思想を落雁に托せしに過ぎざりしが、遂にゲーテはシルレルをエナの寓に訪ひ、シルレルも亦た渠（かれ）をワイマールに訪ふに到り、千七百九



嶽水會雜誌　第貳拾貳號

論說

獨逸文華詩聖ゲーテ（逝世紀）

教授　山川幸雄

第一期ゲーテの幼年時代、即ち千七百四十九年八月廿八日は獨逸文學史上の一大紀念日也、何となれば失の絶大の偉人ゲーテが Frankfurt a. M. に於て最初の聲を揚げたるの日なればなり、爾後ゲーテの生涯に於ける文運發展にして幾階を有し、殊にヘルデル、クラウスチール、ゲーテの幼時情親の間下にありや、歳には父の育ちる其庭に現多の園花を栽培し、其の神氣に觸れ、家には故國フランクフルト市に屹立せる舊市廳下に於立して幾年の歳月を經過し、或は其他の情況をる年一期公爵の招待して歌と高級の光榮に感泣し、或は郷里歸かりし七年戰爭に遭遇して其家歸鉢を守護したる偉兵の苦境に同情の眞摯を注ぎ、或は其家に戻父の病りを聞りし、獨逸荷蘭諸國の旅行をなし、或は其の歸るる時期前後に於て、神心を勞しめ、或は故國に歸行せし時期前後の劇に從事の成績をとゝめ、或は

（一）

ゲーテ論の冒頭
（明治36年3月号『嶽水会雑誌』）

十九年シルレルの其居をワイマールに移すに及び、日夜往復、胸襟を開き、肝胆を咄き、詩作を共にし、情交愈々濃かとなりぬ、此時ゲーテは其名作ウキルヘルム、マイステルの草案改竄に黽めたりしが、即ち書をシルレルに裁して曰く「兄よ、兄は余に二期の修養期を與へ、幸に余をして詩人たること得せしめたり、爾後希はくは余が順逆境遇の奈何を問はす兄が旺盛の気力に依りて、幸に余を誘掖指導せられんことを」、と詩聖の交情の一斑以て窺ふに足る。（後略）

この文章には特に深い考察が見られるわけではないが、ゲーテとシラーというドイツ文豪の交流の話は、シラーを理想主義文学の権化のように崇めていた明治時代の旧制高等学校の生徒には興味深いものがあったろう。次いで山川は『ゲッツ』と『イフィゲーニエ』についてその成立と詳しい梗概を記している。ここでは例として『イフィゲーニエ』の冒頭を引用してみよう。

（二）イフヰニエ史劇五幕。

此脚本は至誠神を感ぜしむ況んや人に於ておやといふ古人の格言に附言すべき「イフヰゲニエ」の精神を以て骨子と為し恋愛の美と世俗の常態とを以て之を修飾したるものにして千七百七十年既に散文体にて完結し「ワイマール」の宮殿に於て演劇せられ其後も舞台に上りしが千七百八十一年に到りゲーテは不規律なる「イアンベン」

詩体に変じ後更に工夫を加へ「ローマ」旅行中終に完全なる五節「イアンベン」に変改せり今日謂ふ所の「イフヰゲニエ」即ち是なり（但し一二の独談の場を例外とす）

イフヰゲニエ既に犠牲に供せられ将に殺されんとせしが偶然女神「ヂアナ」に救助せられ「シーテン」国の「タウリス」に導かれたり時に同国王トアス賓客の礼を以て彼を迎へ「ヂアナ」女神の巫女として尊敬したりき「イフヰゲニエ」は夙に犠牲の非道なるを察知し之を禁止せんとするの志を懐ける人なりしが今此尊敬を享くるを機とし犠牲の残酷にして人情に背けることを王及び野蛮なる国民に諄々として説明し終に国王をして他国人が此国に漂白するときは直ちに捕縛殺戮して女神ヂアナに供せし悪習を廃せしめたり「イフヰゲニエ」は斯の如く遠き異境の客となりしも国の優遇を得しより爾来数年間昼夜の別なく神仕のみを事として更に怠ることなかりき然るに国王トアス偶然其愛子を失ひしより宮中寂寞一人として己の心を慰むるものなかりしば憂悶のあまり「イフヰゲニエ」に己の心裡を明し娶りて婦となさんことを切望しぬ「イフヰゲニエ」大に之を憂い謂へらく情実を述ぶるに若かずと乃ち王に答ふる様吾が身は已に女神ヂアナに捧げたり且つ己の生命は女神の賜なれば心中に終身孤独を守り女神に仕ふ可きを誓ひたり又已は希臘人なれば王の親愛を感謝するに詞なしと雖懐郷の念慮常に絶えず王希くは妾の心中を察し給へと（後略）

とにかく『ゲッツ』と『イフィゲーニエ』をこのように詳しい梗概とともに紹介した例は日本では初めてであって、その意味で山川のこの「独逸文華詩聖ゲーテ」は貴重な文献であるが、残念ながら二回だけで終わっている。この二作だけではゲーテ紹介として完結していないので彼には続けて執筆する意図はあったであろう。だが、こういう形で他のゲーテ作品をも紹介し続けることはとても困難であったと思われる。山川は何も語っていないが二回で中断しているのはそのことを物語っている。もしこの仕事が最後まで完成していたら、それは日本におけるゲーテ紹介史に重要な位置を占めていただろう。

さらに、同じ『嶽水会雑誌』第二十二号の「雑録」欄には山川の非凡な語学力の一端を物語る「独逸の謎」(Deutsche Rätselaufgaben)というのが載っている。これなど長期の留学体験を持つ山川ならではの問題であろう。全部で十二題であるが四番は長文なので、これを省略して紹介する。

PROF. Y. YAMAKAWA.

1. Wie beweist man, dass die Hälfte von Zwölf Sieben ist ?
2. Wie kann man Eins von Neuen so abziehen, dass Zehn übrig bleibt ?
3. Zwei Väter und Zwei Söhne teilten einst drei Heringe unter sich, und es erhielt jede Person gerade einen ganzen Hering. Wie ging es zu ?
4. (略)
5. Was hört ohne Ohren, schwatzt ohne Mund und antwortet in allen Sprachen ?
6. Eines Vaters Kind, einer Mutter Kind und doch keines Menschen Sohn.
7. Was ist stärker als die Flut im Meer ?
8. Es geht den ganzen Tag und kommt nicht von der Stelle.
9. Warum musste das Rätselfragen von der Polizei verboten werden ?
10. Wer sieht mehr, der nur Ein Auge oder Zwei hai?
11. Wann kommt Zeit und Rat auf einen Tag?
12 Weshalb ist ein Baecker, der ausverkauft hat, zu bedauern ?

このドイツ謎に関連して次号『嶽水会雑誌』(明治36・6)の「前号批評」欄に次のような記載がある。

「山川教授の独乙の謎がある、解は次号とやらで題丈であるが誰か解いたものがあるか如何か、これは別として、教授の身近なことに注意せられて吾人を導かるゝのは感銘する所である、尚此上の願ひをいへば、あちらの風俗習慣について一層健筆を振はれたいのである。」

この三年後に山川は『独逸故事熟語字彙』を上梓するが、右の言葉がきっかけとなり編纂を思い立ったのではあるまいか。

解答（Loesungen der Rätselaufgaben）は次号ではなく第二十六号（明治36・12）に掲載された。

1) Man schreibt mit lateinischen Ziffern Ⅶ, streicht die Hälfte wagerecht durch, worauf Ⅶ bleibt.

2) Ⅳ　Ⅰ　Ⅹ

3) Es waren die zwei Väter und zwei Söhne nur drei Personen, nämlich ein Enkel mit seinem Vater und seinem Grossvater ; der Vater von diesen dreien ist Sohn und Vater gleich.

4 （略）

5) Das Echo.

6) Eine Tochter.

7) Der Wind. Er treibt sie hin und her.

8) Eine Uhr.

9) Weil sie die Leute die Köpfe zerbrechen.

10) Der Einaugige. Denn er sieht am andern zwei Augen.

11) Bei Hochzeit und Heirat.

12) Weil er brotlos(Brot los)geworden ist.

山川は解答が当初予定した二十三号誌上ではなく、遅れたのは当時京都にいなかったせいだとしている。

なお山川は帰国後、鉄道技師長谷川謹介[12]の次女・柳子と結婚した。



山川幸雄・柳子夫妻

柳子（一八八三〜一九七六）はお茶の水女学校を出身で、明治中期のブルジョアの家庭に厳格なお嬢さんとしての教育を受け十九の年に年の離れた幸雄のもとに嫁いだ。十七歳頃から佐々木信綱に短歌の指導受け、長く歌を友とした。九人の子供を育てた。

さて山川幸雄は明治四十一年（一九〇八）一月十九日付で第一高等学校教授に転任になった（高等官四等）。一高教授の傍ら、日本大学、法政大学でも独語・法律の講師を務めた。

『三高八十年回顧』に片山哲（明治41年一法）が「自由の三高」という文章を寄稿している。その中でドイツ留学から帰国したばかりの山川から流行のドイツの歌を習ったこと、三高時代の教え子たちが東京で同窓会を開いた際に、一高に移っていた師を呼んで留学時代の話を聞いたことがあったと書いている（同書百三十四頁）。山川は生徒達に親しまれる性格の持ち主だったようだ。彼には長い留学だっただけに話すことは山ほどあったであろう。それに一般に明治の若者は先輩や教師の外国留学体験談を聴くのが好きだった。

『独逸故事熟語字彙』の出版

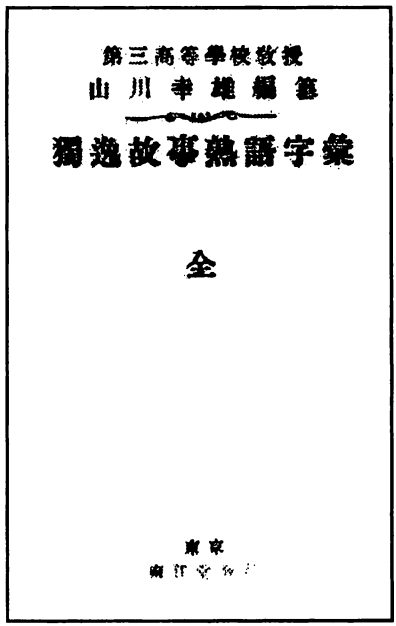
山川は三高教授時代の明治三十九年（一九〇六）四月、南江堂より『独逸故事熟語字彙』編纂・上梓した。欧文タイトル：**Deutsche sprichwörtliche Redensarten ins Japanische übersetzt und erörtert von Dr. Yukio Yamakawa.** 三百四十八頁。小本。定価七十五銭。これは山川の代表的な著作である。ドイツの故事と熟語に適訳を加えるのは容易ではないが、十五年という長期留学によって習得したドイツ語の造詣は非凡なものがあったことを本書はよく示している。序文で山川は次のように述べている。

独逸故事熟語字彙序

今日独逸語の解し難きは故事と熟語とにあり若し能く此の二者に通ずるときは豈に彼の国語を自在に解し得らるゝのみならず亦善く彼の国の事情を詳にするを得て新智識を益すること莫大なるべし

我国独逸語を研究する人近来著しく其数を増し独逸語に関する辞典の出版も亦頗る多けれども良書と称すべきもの甚稀なり

客年十一月出版せられたる登張藤井両氏の共著に成りし独逸熟語新辞典の如きは蓋し屈指のものなるべけれども単に彼の国の熟語を和訳せられたるのみなれば深く彼の国事情を探らんとする人の為には未だ足れりとせず深く彼の国の事情を探らんと欲するときは勢彼の



『独逸故事熟語字彙』扉（明治39年）

国に於ける韻文は勿論稗史小説の類演劇脚本の類をも研究せざるべからず是等の書を研究せむとするときは必ず先づ彼国の故事に通ぜざるべからず

余独逸語を以て高等教育に従事すること数年未だ充分の経験を有せずといへども常に学生の為彼の国に於ける故事と熟語に関する良参考書なきを憾み授業の傍此両者を抄出して之が解釈を試み客年七月終に一偏の草稿を得たり

時に偶然南江堂主人の来訪せらるゝありて之が出版を勧められたりしも公務多忙にし其意を果さゞりしか頃日再三請はれたるを以て辞する能はず遂に之を世に公にす本書は独逸語の研究に最も必要なる故事と熟語を聚集して之に解釈を附したるものなれども其実故事の方に重を置きたれば熟語の数に至りては其数少なきが如くなれども韻文或は稗史小説演劇脚本等に引用せし故事を詳にせむする人の為には益する所決して少なからざるべし但余は博言家に非ざるを以て時に或は隔靴掻痒の感なき能はず覧者幸に之を諒せよ

猶終りに臨みて一言すそは他にあらず京都帝国大学生若山三郎君[13]が本書の編纂に際し好意を以て非常に盡力せられたること是なり余深く同氏に対して之を謝し併せて此由を覧者に謹告す

明治三十九年三月

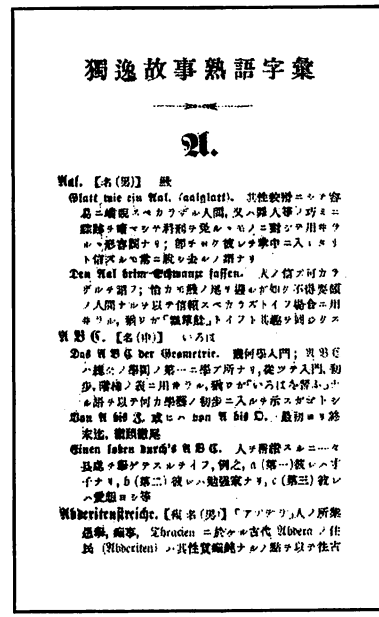
京都中立賣に於て

山川幸雄識

山川はまず、ドイツ語の難しさは故事と熟語にあること、この両者に通じればそれを自在に解し得るのみならず国情を詳にすることが出来、新知識が得られること、我が国でドイツ語を研究する人が近来著しく多くなったこと、それに伴い独語辞書の出版も増えたが良書は稀なことを述べている。次に山川は前年に出版された登張信一郎・藤井信吉共編の『独逸熟語新辞典』（大倉書店）は屈指なものではあるが、これはドイツの熟語を単に和訳しただけで、そ

の国情を深く研究する人には不十分だとしている。そのためにはドイツの韻文は勿論稗史・小説・脚本の類も研究しなければならず、そうするにはドイツの故事に通じていなければならないと述べている。そしてその故事を中心に集めた自著に対する自負が感じられる。

Aderを例にして両者を比較してみよう。『独逸故事熟語字彙』はすべてドイツ文字(Fraktur)を用いているがここではラテン体によって紹介する。最初が『独逸故事熟語字彙』で、次が『独逸熟語新辞典』である。



獨逸故事熟語字彙

A.

Ader. 【名(女)】 脈

Es ist keine gute Ader an ihm. er taugt durchaus nichts.ト同ジク、彼レハ全ク取柄(トリエ)ナシノ意；古代脈ヲ以テ人間ノ心意、精神ノ宿レル所ト信ゼルニ基ク

Es schlägt mir keine Ader dar nach. ich habe keine Neigung, keine Begabung zu etwas.

其事ニ対シ余ハ何等ノ傾向、稟才ヲ有セズ eine dichterische, eine musikalische Ader haben. 詩才，楽才

Er hat keine Ader von seinem Vater. gleicht ihm in keiner Stücke, 彼レハ父ニ毫モ似ズ(性質芸能等ニ

同書本文第1ページ

於テ)

Ader, die . 脉官, 鉱脉.
die goldene(güldene)
einem die－öffnen(schlagen).或人を刺絡する.
zur－lassen.
es ist keine gute －an ihm. 彼には一点の長所なし.
es hat keine － von seinem Vater. 彼は何れの点に於ても父に似ぬ.
er hat keine dichterische－.彼は全く詩才を有せぬ.
solange noch eine － in mir schkägt. 余の呼吸の通ふ内は.
es hat eine gute － getroffen. 彼は幸福を得た.
es schlägt mir keine － darnach. 余は夫れをなすに適せぬ.
an dem(ママ) ist keine falsche －. 彼は頗る善良である、有為の士である.
－ im Steine.
durch Steinmassen untergebrochene－n.岩石にて中断せられたる鉱絡.

語彙や用例数からみれば『独逸熟語新辞典』の方が明らかに『独逸故事熟語字彙』よりすぐれている。だが序文で熟語より故事に重きを置いたと断っている通り、語の由来等については『独逸故事熟語字彙』の方が詳しく懇切である。そのことは次の一例を見ればはっきりする。

Angethan. 【anthunノ過去分詞】 惑ハス

Es einem angethan haben. ナホ、einen bezaubert haben, ト同ジク人ヲ蠱惑スルノ義；然レドモbezaubern ナル語ヲ避ケ只曖昧ナルthun（何カヲナス）トesナル語ヲ以テ蠱惑スルノ義ヲ表ハス、即チコノ曖昧ナル語ノ裏ニ魔術ノ存セルナリ

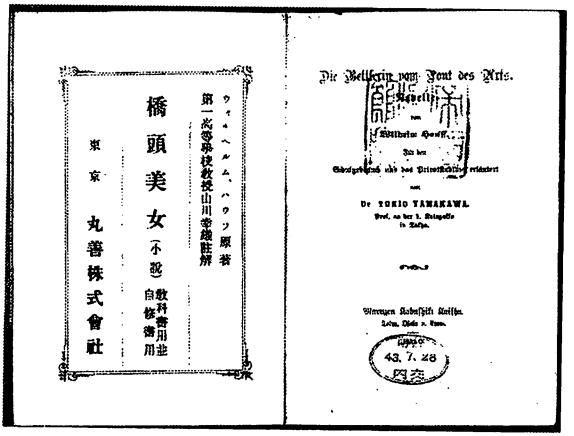
『独逸熟語新辞典』にはAngetban.ないしAngetan は項目としては挙げてない。一口に言えば山川の『独逸故事熟語字彙』はドイツ語教師や専門家向けであり、登張・藤井の『独逸新熟語辞典』は学生・一般向けであった。前者は初版だけで終わったのに対し、後者は明治三十九年一月の時点で第三版を出しているのはそれを反映している。

その他の編著

山川は明治四十二年（一九〇九）にクライストの『Michael Kohlhaas』（ミヒヤエル・コールハウス）の註解書を出している。前半の原文（一～一二二頁）と後半の「註釈及び難句解釈」（一～八三頁）から成る。奥付には著作者兼発行者・山川幸雄、発売所・冨山房となっているが、タイトルページにはSelbstverlag des Herausgebersとあるので私家版であったと見て良かろう。山川はクライストが好きだったのだろう。奥付によると山川の住所は「東京市小石川区表町百〇九番地」である。

次いで同年に『和文独訳練習』「附」独訳字彙』、『同答案』(Schlüssel) を丸善から出した。独文タイトル・Übungen zum Übersetzen aus dem Japanischen ins Deutsche. 二巻から成る。第一巻は史伝、談話、叙事、伝記、比較、論説等に項目を分けて日本文を排列し、それを独訳するに必要な単語を辞書風に集めている。第二巻は回答集で、

第一巻の日本文に対するドイツ文を載せている。当時ある評者は「著者は永く独逸にありて現今最も実用的独逸語に通ずる一人なれば宜しく其才筆を揮って自ら純粋の日本文を独訳すべかりしなり、著者の力を以てすれば巻尾の字彙を編む時間の以て優によく之れを成し得たるべきを信ず。然るに只独逸読本類を抜て之れに日本訳を附し之を更に重訳せしめんするが如き観あるは大に吾人の著者に期待せる所と反す」[10]と不満を述べている。だが語を継いで「単に和文独訳の書と見ずして又之を独文和訳の参考書に応用すれば初学者を利すること少なからざるべし。殊に巻尾の字彙は兎に角便利なるものにて編者の労を多とするにたる」とも述べ、評価している。



ハウフ『橋頭美女』の注解書

『橋頭美女』は明治四十三年（一九一〇）に丸善から教科用・自習用として出版されたもので、ハウフの原著「Die Bettlerin vom Pont des Arts」（アール橋の女乞食）の原文と詳しい注を施したものである。本文百七十五頁、「註釈及難句解釈」九十六頁。当時の推奨文を紹介しょう。

「有名なるウイルヘルム、ハウフの作るところの小説にして着想穏健、行文流暢、会話面白く、読畢りて興を惹くこと深し、殊に山川先生の註釈を添ふ、学生の教科書又は自修書として、最も佳なるもの也。」[11]

ドイツ後期ロマン派の小説家で童話作家として知られるヴィルヘルム・ハウフ（一八〇二～二七）は明治のドイツ文学移入期にシラーと並んでもてはやされた。森鷗外の最初の著作『盗侠行』（明治十八年）のことはよく知られているがこれもハウフの「切り取られた手の話」（Die Geschichte von abgehauenen Hand）

など『隊商』(Die Karawane) 中の諸編を漢詩訳に翻案したものであった。それ以前にも東大医学部予科では明治十三年から十四年にかけて四等生に対し独語教師の吉田謙次郎がハウフの小説を教科書に用いたことが申報書に出ている。[16] グリムとは異なる豊かな空想を明るく健康な現実味で支えた独特の魅力を持つものであった。それが明治の読者の興味を惹いたようだ。明治二十年代になるとハウフの小説の訳本が幾つか出版されている。従って山川の『橋頭美女』はハウフ紹介の先駆ではないが、翻訳ではなく註解によってハウフの原文を読む手助けをした意味はあった。しかもその註解は懇切・詳細なものであった。要するに山川は語学力ですぐれていただけでなく几帳面で、教育的配慮を怠らない人であった。

晩年

だが、山川は病気のために大正二年（一九一三）十二月文部大臣宛に退官願[17]を提出した。

退官願

私儀

本年九月以来疾病ノ為メ休校療養

今後尚一層静養ヲ要スルニ付本

官免依テ別紙診断書御願也

大正二年十二月

第一高等学校教授山川幸雄

文部大臣法学博士奥田義人殿

山川の願は入れられ大正二年十二月二十五日付で依願免本官（内閣）となった。履歴書には同日「在官十一年以上ニシテ退官ニ付年俸月額五箇月半分下賜」（文部省）とある。こうして十二月二十五日付で依願免本官となった。翌三年一月二十日、特旨を以て位一級進められ正五位に叙せられた。以後、彼は病気療養の生活に入ったと推察されるが、詳細は不明である。ただ長男の幸世によると「ローマ法の研究を発表しようと整理中、長いアルコール生活と極度の勉強との為腸をわずらひ、遂に立つ事が出来ず、…」[08]と証言している。

幸世によれば、幸雄は父親としては、病気になってからは気まぐれで、理由もなくひっぱたいたりしていい父ではなかったが、それまではなかなか子供に対して良き父だったという。ドイツ的、スパルタ的な教育方針を持っていたらしく、悪いことをしたり、わがままだったりすると尻をたたいたが、寒い朝には大勢の子共たちに順番に着物を着せてやったりした。また夜ストーブのそばでドイツのおとぎ話を聞かせたり、ドイツ人のクリスマスに連れて行ったりしたという。

山川幸雄は大正十一年（一九二二）五月二十六日亡くなった。享年五十五。同年五月二十八日付東京朝日新聞には次のような死亡広告が載っている。

父正五位山川幸雄病気の処本日午
前九時十五分逝去致候間此段辱知諸君
に謹告謹告仕候
葬儀は行列を廃し来廿九日午後二時
谷中斎場に於て神式に依り相営申候

略儀ながら本広告を以て御通知に代へ申候

大正十一年　男　幸世

親戚　片山国嘉

五月廿六日　総代　長谷川敬三

片山国嘉（一八五五～一九四二）は幸雄の姉・かめの夫に当たる人。東京帝国大学医科大学教授を務め、法医学者として著名であった。長谷川敬三は岳父の長男で、柳子の実兄である。



東京谷中霊園にある山川幸雄の墓
（筆者撮影）

山川家の墓は東京都台東区の谷中霊園にある（甲9号13側）。山川家は神道を奉じていたので戒名はない。

夫の死後妻の柳子は子供たちを育て天寿を全うした。長男・山川幸世（一九〇四～一九七四）は演劇関係の仕事をし、その方面で知られていた。幸世の回想によると、母は我が強く、そのため幸世と度々衝突することがあった。だが自分が文学や演劇に興味を持つようになったには母の影響によるところが大きいと語っている。

幸世の子の山川泉は存世中であり、父の影響を受け現在、創樹社という舞台装置の会社の代表取締を務めている。

注

(1)『明治医家列伝』(第二篇、明治二十五年)二七五〜二八六頁。

(2)外務省外交史料館「マイクロフィイルム　旅一006(コマ144)より。

(3)ベルリン・フンボルト大学文書館長Schulz氏による。

(4)ゲッチンゲン大学文書館蔵「文書」(Akte, Nr.324)

(5)バール(Carl Ludwig von Bar 1836-1913)ゲッチンゲン及びベルリン大学で法律を学んだ後、裁判官として活躍。一八六二年法務大臣ルートヴィッヒ・ヴィントホルストの秘書官としてハノーファー市薬剤師令草案を作成。六十三年大学教授資格を得た。その後ロストック、ブレスラウ各大学教授歴任後、七十九年ゲッチンゲン大学教授就任。刑法及びドイツ国際私法の理論で指導的地位を占めた。

(6)[Signatur 8 Diss.Jur.Göttingen 1899/1900,K-Z,18)

(7)『ドイツ東アジア自然民族学協会会報』(Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens)第八巻第二部(一九〇二)の会員名簿(一九〇一年十二月現在)。

(8)同誌第八巻第三部(一九〇二)の会員名簿(一九〇一年十二月現在)。

(9)『獄水会雑誌』第十九号(明治35・11)「校報」欄。

(10)『獄水会雑誌』第二十五号(明治36・11)「校報」欄。

(11)例えば、『獄水会雑誌』第二十六号(明治36・12)「東京文科大学通信」に「夏目先生の英語、洋行帰りの先生、Machbethの Monologueなど、山川先生 Hermann の朗吟に比べても劣らぬ程の巧者にて、中々の聞きものに御座候…」とある。

(12)長谷川謹介(一八五五〜一九二〇)明治の鉄道界の重鎮。山口県の人。明治七年鉄道寮に出仕し、以後鉄道技師として活躍。二十五年日本鉄道会社に入り、後に台湾総督府鉄道技師長に任じ鉄道部長であった。

次いで四十一年鉄道院技師に転じ東部鉄道管理局長を命じられ、四十四年西部鉄道管理局長に転じた。

(13) 若山三郎は明治三十六年三高の第一部（法科）を卒業し、当時京都帝国大学法科大学の三年生であった。

(14) 明治四十二年十一月号『独逸語学雑誌』「新著紹介」百八十一頁。

(15) 明治四十三年十二月号『独逸語学雑誌』巻末広告。

(16) 資料叢書・東京大学史『東京大学年報』第二巻、「独乙語学准助教授吉田謙二郎(ママ)申報」八十二頁。

(17) 国立公文書館蔵「大正二年　任免記　十二月三止　巻三十五」、請求記号「2A　19任　696」

(18) 山川幸世「山川幸雄」。山川幸雄の長男・幸世は山川家及びその親族の人々について経歴や人となりを記した書き付けを残している。ただしこれは残念ながら記憶によって書いたらしく、幸雄が独逸協会の中学に学んだとか、留学先をミュンヘン大学としたり、日独会話の著書があるとするなど明らかな誤記が見られる。

附記　ドイツ留学中の山川について情報を提供されたベルリン・フンボルト大学文書館館長W・シュルツェ博士及びゲッチンゲン大学文書館のU・フンガー博士、また人物写真など貴重な資料を提供された山川泉氏に謝意を表したい。

（元熊本大学）